

これまで4回開催して、おかげさまでご好評で、ご来店いただいたお客様から「次はどんなテーマでいつやりますか？」などの声をいただいています。これまでは「転調」「コードとは何か」「コール・ポーター特集Part1」「同Part2」と続けてきました。次回の企画を練っていたのですが、10/27(日)午後「ガーシュイン特集」というテーマで実施することにしました。

選曲や解説ポイントを調べていて、ミュージカル「ポーギーとベス」について「エッ、そうだったの？」という色々な発見があり、レクチャーライブで「Summertime」などの挿入歌を取り上げる予定ではありますが、背景やストーリーについてはレクチャーで取り上げる時間はないと思われるため、メルマガで書くことにしました。

◎「ミュージカル史上の最高峰」しかしオペラ？

「アメリカン・ポピュラー・ソングの黄金時代 (Easy to Remember)」の著者、ウィリアム・ジンサーはこの本で、「ポーギーとベスは、アメリカのミュージカル史上最高峰 (Everest) の作品だ」と書いています。

超有名なSummertimeに加え、「I Loves You Porgy」など知られている名曲も多いのですが、ジンサーが「Everest」とまで書いている理由の一つは、重厚なストーリー的な面にあると思われます。それまでのミュージカルのストーリーは、白人社会の男女の恋愛を軸にした軽い筋立てがほとんどだったのに対して、ポーギーとベスは黒人社会における男女の愛憎、人間関係を、リアルにシリアスに描いているのです。

物語の舞台はサウスカロライナ州チャールストンのCatfish Row(ナマズ横丁)という黒人居住地区で、チャールストン在住の白人の詩人、デュボース・ヘイワードという詩人が1924年に「ポーギー」というタイトルの小説として発表しました。その後、舞台劇としてニューヨークの非商業演劇組合であるシアターギルドで上演されました。この時点では音楽はついていません。

もともと、黒人音楽やブルースに傾倒していたジョージ・ガーシュインは、小説を読んだ時から、本格的な舞台音楽として作り上げたいと考えていて、シアターギルドとの権利関係の調整に何年もかかったものの、1933年から曲作りにとりかかりました。作詞には、ガーシュインの曲に常に歌詞をつけた兄のアイラ・ガーシュインとヘイワードが共同で当たりました。

ピアノを弾いているのがジョージ・ガーシュイン、真ん中が原作のヘイワード、右がアイラ・ガーシュイン

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/gershwins&heiward.jpg>

ジャンルにもこだわり、同じ音楽付きの舞台演劇ではあっても、軽い感じの「ミュージカル」ではなく、「フォーク・オペラ」と銘打ちました。国民オペラ、民族オペラとでも訳せるでしょうか。確かに、オーケストレーションにもこだわり、オペラにつきもののレチタティーヴォもあります。レチタティーヴォとは、無伴奏で歌われるメロディ付きのセリフ部分を指します。

◎重く哀しいストーリー

さて、問題はストーリーです。紹介しているページがありましたので御覧ください。現在の日本人の感覚では、かなり重苦しく、もっと言えば救いがないとも感じられるかもしれません。少なくとも自分はそうでしたので、落ち込んだ気分時には「後で」クリックした方が良くもありません(笑)。

<http://jazzsong.la.coocan.jp/es071215.html>

まだまだ人種差別が激しかったアメリカの1920年代、社会としては最下層だったと思われる南部サウスカロライナの港町の黒人居住区、Catfish Row(ナマズ街)。そこで、足が不自由でヤギが挽く車に乗っている乞食 (disabled beggar) のポーギーが、タイトルに出てくる主人公の一人です。

写真は初演の頃と思われる、Catfish Rowの舞台装置

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/porgy&bess%20stage.jpg>

ストーリーにあるように、ポーギーはならず者クラウンの愛人だったベスと愛し合うようになったものの、取り調べの間に麻薬の売人スポーティン・ライフ（名前だけ爽やか）がベスをニューヨークに連れて行ってしまいます。

これだけでも悲劇的なのですが、それを知ったポーギーがベスを探しにニューヨークに旅立つというラストになっていることが、さらにやりきれない感じになっているような気がします。ポーギーがそこで呆然としたり慟哭して終わってれば、悲しくはあるものの、終わった感がありますが、そこから、不自由な身でベスを探しに遠いニューヨークに向かう（探せる可能性はほぼないでしょう）というのでは救いがないように感じるのです。

しかも、ポーギーは、当時のミュージカルや曲のPRを見ても、不当に冷遇されている感があります。以下の、サマータイムの楽譜の表紙を見てください。下の方でキスをしそうになっている男女がポーギーとベスだと普通は思いますが、実はこの男性はベスの元情夫のクラウンなのです、そして、ニューヨークを指さしているのはスポーティン・ライフの指です。じゃあ、ポーギーはといえば、中央部でヤギが挽く車に松葉杖とともに乗っているのです。

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/porgybesscover.jpg>

これではあまりにポーギーが可愛そうで救いがないというのが、個人的な感想です。恐らく同じように感じる方も多いのではないのでしょうか？この小説やミュージカルを読んだり、観ることを想定されているのは白人、しかも知的で経済的に余裕がある人達だと思われませんが、そこにこういう世界を提示するというのは日本人にはなかなか理解できない感覚だとも思います。

しかし、考えてみると、黒人の不幸な半生を描いた「アンクル・トム的小屋」（ストウ夫人原作）にしても、白人社会で広く評価を得たのですから、日本人には理解が難しいですが、アメリカ社会には黒人の境遇に対するシンパシーというものがあるのでしょうか。

ポーギーとベスは1935年にブロードウェイで初演されましたが、「アメリカン・ポピュラー・ソングの黄金時代」によると、演劇評論家からはミュージカルではないと言われ、音楽評論家からはオペラではないと言われ、商業的には成功しませんでした。

◎曲の評判から再演が決まり、商業的に成功

しかし、直後から「Summertime」, 「Bess, You Is My Woman Now」, 「It Ain't Necessarily So」などの挿入歌は人気を呼び、ジョージ没後5年経った1937年には再演され、286回公演という成功を収めました。10年後には、世界ツアーが行われ、北米、南米、ソ連を含むヨーロッパ、中東、中南米の28カ国を回って305回の公演があったそうです。1997年にはガーシュイン生誕百年祭世界ツアーの一環として日本公演も行われました。

サミー・デイビス・ジュニアを主演として映画化されたのですが、制作陣内の対立、ガーシュイン遺族からのクレームなどで日の目を見ることはありませんでした。現在、アフリカ系オペラ歌手とロンドンフィルによるDVDがamazonなどで買うことができます。今それを観ながら書いていますが、字幕がないこともあって、なかなか進みません(笑)。

<http://jazzlydian.com/mailmagazine/porgy&bessDVD.jpg>

日本人がミュージカルに期待するような、夢、希望、甘い恋愛といったような要素はなく、重くシリアスな内容ですが、やはりこれはオペラとして捉えるべきなのでしょう。オペラであれば、ドロドロとした愛憎を描いたストーリーや悲劇的結末がむしろ主流ですし、クラシック愛好家はそれを飲み込んだ上で楽しんでるわけですからね。

そうした事情を頭に入れた上で、上記DVDの1シーンがyoutubeにあったので御覧ください。曲は「Bess You Is My Woman Now」（ベス、お前は俺のものだ）。やはりこれはオペラの中のアリアですね。オーケストレーションも凝っているのが分かると思います。

<https://www.youtube.com/watch?v=apiq3VN2Ra8>

今回は、ポピュラーチューンとして成立したポーギーとベスの挿入歌について解説する予定です。

-----  
Lydianからのお知らせ

レクチャーライブ「ガーシュイン特集」の詳細をお知らせします。今回ご紹介したポーギーとベスの収録曲含め、珠玉の名曲を、音楽的な面と歌詞の面、両方から解説し、歌もたっぷり楽しんで頂ける他にはないイベントです。

◎Lydianレクチャーライブ「ガーシュイン特集」  
10/27 (日) 13:00開店 13:30開演

- ・Remi (歌詞解説・ヴォーカル)
- ・武藤勇樹 (p)
- ・マスター中川 (楽曲解説・進行)

ヴォーカルは今年の浅草ジャズコンテストヴォーカル部門・金賞受賞のRemiさん、素晴らしい声と発音、表情、そして歌詞の世界をわかりやすく説明する得意技をお持ちです。今まで何となく聞いていた英語の歌詞に、「実はそんな意味が込められていたのか!」と目からウロコがたくさん落ちます。

ピアノは若手の超有望株、武藤勇樹さんです。Remiさんの伴奏を含め、何度もLydianに出演いただいておりますが、毎回聴き惚れています。歌心とタッチが素晴らしいです。近い将来、必ず大きな舞台で活躍するでしょう。

曲の音楽的な解説は自分が担当します。ガーシュインがポピュラー音楽で初めて使ったと思われるコードの響きがどんなものか、歌詞を曲でどう表現するか、I Loves You Porgy冒頭の印象的なメロディの秘密などなど、曲をより楽しんでいただける情報満載でお届けします。

次回メルマガで取り上げる曲を発表します。お楽しみに!

以上